

華嚴の縁起説

石 橋 真 誠

一

仏陀の正覺が縁起の内觀によつてかたられていることはいうまでもない。即ち「われはじめて仏道を成じて十二因縁を思惟す^①」と説かれる縁起説は「これ有るが故に彼有り^②」という因縁法であり、この縁起の法は「如来この世に出づるも出でざるもこの法は常住として常住法界である^③」という縁生の法と結合して仏教思想の根本的立場を示している。ここに於て仏教が思想的に仏教として成立するのは、この縁起説を離れてはあり得ないし、また仏教思想史は縁起説の展開として成立する。即ち「若し縁起を見るものは便ち法を見る。若し法を見るものは便ち縁起を見る^④」と、「すでに法、有れば則ち我有り^⑤」と説かれて縁起から法へ、法から縁起へと、縁起の構造は仏教思想史の上に於て展開していった。

いまこの縁起説の展開を特に中国華嚴教学の上に於ていかに問われてきたかを考察してみたい。

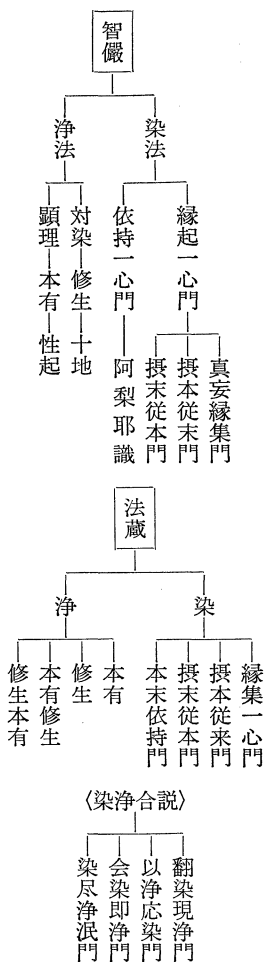
華嚴の縁起説（石 橋）

二

華嚴の縁起説が華嚴經の上に求められることはいうまでもない。それは特に華嚴の性起としての縁起がその根本的立場であつて、華嚴の縁起説は海印炳現の根本一乘に於ける体系である。これはさかのぼつて阿含經のいわゆる法界常住を立場とする縁起即ち法界縁起にほかならない。或はまた理事無礙である性の立場と區別する意味では事事無礙としての無尽縁起ともいわれる。

さらにそれは單なる理事無礙にとどまらず事事無礙であり、相に対する性の立場でなく、むしろ性起としての性相融會せられる意味でなければならない。法藏によれば、かかる法界縁起の組織は染法、淨法、染淨合説との三種の立場からくり返される^⑥。それは智儼の考え方を受けついだものであるが、智儼によれば、染淨を區別するのみで、第三の合説の立場には及ばなかつた。ここに両者の區別を図式的に対応して

みると、



智儼は淨法緣起に於て修生本有とは、十地品の立場として、本有と本有修生とは、これを性起品の立場とみるのみでなく、前者を対染顯妄の意味として、後者の顯理が即ち淨法の立場として考えることができる。しかるに染法緣起に於ける對染の立場、即ち修生と修生本有の十地品の立場に於ける染法緣起の攝末從本門が理解されるとすれば、顯理の立場、即ち本有と本有修生との性起品を立場として染法緣起の攝本從末門が理解されるといえるであらう。またこのような本有の會染真妄を緣集するところの一心はすでに本有修生、染法、淨法の相對的立場ではなく、ただ翻染現淨門として修生的であり、かつ攝末俱本門と相對し、以淨應染門として本有的であり、さらに攝本從末門に對するところであつて、それは會染即淨門、染盡淨泯門にいたつて、その絶對的意味を現するということである。かくて染淨合説は智儼が淨法緣起に

於て考えられる對染顯理の立場によつて、かえつて染淨緣起と綜合するものである。ただ緣起説の組織は華嚴經に於ては十地品と性起品を中心として、その一心緣起と性起果現との立場によつてみられる。しかし因果の二分を統一するところのものが一心であり法界でなければならない。そこに性起として緣起、緣起に於ける性起が理解され、果によつて示すとすれば、性起の当体、即ち、それは性海果分であり、因によつて現わせば一心緣起にほかならない。ここに因の外に性起としての緣起がある。緣は性に對するとき不起に對して起である。本有に對して修生の意味をもつ。また淨に對して染の立場をとるとも考えられる。しかし緣起の立場からいえば、そこには染の意味に於て考えられるとともに淨の立場でもある。しかし本有の立場からすれば、ただ淨の意味に於てのみであつて、染の立場をみることはできない。故に染淨に於ていえば、性起を立場とする緣起は染の立場をもつて、ついに淨の立場に帰するところの緣起である。染は淨に對立する立場ではなく、かえつて淨を現成する啓機の意味を有するものでなければならない。

故に淨といえども、その淨は染即淨ともいうことができ、また染尽淨派というべきであろうか。さらにこれを性起に於ていえば、性は不起、本有は唯淨の意味であつて、起はこれに對して、起・修生・染淨の立場をしめすことになる。故に性起は即ち性起であつて縁起であり、本有と修生、淨と染を綜合して、これを組織づける立場をしめすこととなるのである。

三

性起の立場を論理づけたところのものは、法藏に於ては十義の組織であるが、さらにこれを論理的に明らかにしたもののは、法藏によれば性起の性は理と行と果との三つの立場から、起はこれに應じて了因顯現と聞熏資養と応機化用との三相に分けて考えられる。さらにこの三つの立場は相互に相關するところにそれぞれ性起の意味内容を明らかにするのである。即ち理と行と、さらに行と果と、しかしして果と融會して性起が本来の意味である。故に理も行も、ついには果に歸し、果としての融會が即ち性起の根本の意味でなければならぬ。即ちこの三性起のそれぞれの関連は第三重の果性起に歸して、そこを立場として反つてなり立っているのである。故に

理行円成之果 為性赴感應機之用 為起是即理行 徹至果用故起

華嚴の縁起説（石橋）

唯性起也^②

というがごとく解釈される。

理は行としての因の立場での性起も究極的には反つて果の立場としての性起の意味によつて成立するのでなければならぬ。然し果性起とは樹下正覺の果現、即ち如來の出現に外ならないのである。故に澄觀は性起とは、応現の意味に外ならないのであるという。ここに於て性起と縁起とは相違せざるのみでなく、相成の關係にあるという。故にまた両者は全く一を以て他を奪う相奪の意味にも解せられる。従つてまた相即する關係に於てでなければならぬのである。ここに於て相違も相成もそれは全く相奪であると同時に相即の意味に於て同一なる意味である。かかる縁起と性起との合致は因を立場とする。理や行に於てまだ成立せずして、それはやはり果としての性起に於てはじめて究極的に現成するのであると云わなければならない。そしてそれはもつとも因果不二の關係にある。かくて性起の論理は因果の、或は性と縁との相奪と相即との合一的立場に於て成立するのであり、これが縁起説の究極的立場であると考えられる。かくて、ここから仏敎教學に於て成立する多くの縁起説が体系づけられるのである。それは所謂、十重唯識の思想であつて、一相見俱存、二摂相帰見、三摂数歸王の識相の立場に對して、四以末歸本、五摂相歸性、六転眞成事、七理事俱融の心性の立場を解し

て、ここに阿頼耶識を立場とする大乘始教の縁起説と、如来藏を立場とする終教及び頓教の縁起説を体系づけるのである。そしてついに、八融事相入、九全事相即、十帝網無礙の三重によつて、即ち法界縁起、如来藏縁起としての縁起説、即ち円教の立場に統攝されるのである。故にこの十重唯識の全体系は円教の内容としては、即ち同教の立場に於て組織づけられ、別教の立場としては特にあとの三重に於て円教独自の立場が理解される。澄観によれば、さらに仮説一心として小乗の立場を加えて第六転真成事を除いて十重を解釈している。この澄観の縁起説は、法蔵の縁起説に對して法性融通の事理無礙としての縁起に對する性起がその立場である。そしてそこでは絶対の一心に於て示されるのである。即ちこの性起の立場は一心法界にして所謂、靈知不昧の立場であり、華嚴の性起を靈知の禪に於てとらえられたのであった。澄観によれば夜摩天宮偈讚品の唯心偈⁽⁹⁾によつて、心を總相として悟れば浄縁起を成じ、迷えば染縁起となすと縁起に染浄の二面があるが、心体は染浄とことならず、如来は性悪を断ずることなく、また闡提は性善を断ずることがないとする。この澄観の縁起説は、如来の出現として如理覚現といわれ⁽¹⁰⁾

一 不相違は縁起と性起との上に如来の出現を論理的に説明して、さらに歴史的に

二 相成、法性融通の一心として法界を成ずる立場、次に

三 相奪、相い奪う一面が、又相成する關係であり、さらに

四 相即、縁起即性起 (一)の不相違についてさらに嚴密に述べ、相成と相奪が結合して相即へ

五 以人表法は性起妙德菩薩であり

六 此妄隱真——真妄常に妄が真を隠す。

と澄観は六義を述べて縁起と性起の關係を論理的に説き示したのであった。さらに縁起と性起の相即の關係がなりたつのは靈知不昧の一心の立場に於てであるという。これに對して宗密は澄観の一心を受けて縁起を解し、小乗仮説の一心、始教頼耶の一心、終教如来藏の一心、頓教の泯絶染浄の一心、円教の總該の一心によつて理解し、別教一乘は性起門に、同教一乘は縁起門に於て、この二門は不二交徹するところに円教の立場があると示している。この宗密の縁起説は多く文超の影響を受けて、性起とは法界の性全体が起つて諸法となり、縁起はこれを染と浄とにわち、浄縁起は染縁起をもつて性起に合一する。所謂、染浄は縁起の相對的立場であり、これが融會して法界の性に於て合一する性起こそ華嚴經の根本的立場であり、宗密はそこに教禪一致の立場をみたのである。即ち宗密にとつて、縁起説は縁起觀として、法界縁起を所入とし、普賢行願を能入とした統一的縁起説を展開したのであった。(注(1)と(4)は省略)

(京都文教短期大学助教役)